



Title	スペイン帝国と中華帝国の邂逅 : 16・17世紀のマニラ
Author(s)	平山, 篤子
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/60050
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	ひら やま あつ こ 平 山 篤 子
博士の専攻分野の名称	博 士 (文学)
学位記番号	第 25592 号
学位授与年月日	平成24年7月10日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	スペイン帝国と中華帝国の邂逅 —16・17世紀のマニラ
論文審査委員	(主査) 教 授 秋田 茂 (副査) 教 授 江川 温 コミュニケーションデザイン・センター 兼 教授 桃木 至朗 流通経済大学教授 関 哲行

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、学位申請者が過去約20年にわたって行ってきた、16・17世紀のスペイン帝国のアジアにおける植民地、フィリピーナス諸島におけるスペイン人と華人との邂逅の歴史的過程に関する研究を、一冊の研究書としてまとめたものである。論文は、序章に続き、全8章、終章および付属資料からなり、全493ページで構成される。

本論に先立ち、序章では、スペイン人と華人の邂逅を「地球一元化」(グローバル化)の過程における一つの画期として位置付け、スペイン人の言説と、両者が直接衝突した暴動事件を中心に、「ヒトの移動と邂逅」を考察する本書の課題と構成が提示される。続く第一章では、1450-1650年頃のスペイン・カトリック帝国とフィリピーナス諸島の概要と、カトリック布教を掲げたスペインの海外展開の特徴が提示される。

同書は二部構成から成る。第一部「スペイン・カトリック帝国の対チナ観」(第二章―第五章)では、明国宣教のための軍事侵攻・統治までを想定した計画、およびその正邪に関する議論を主題とした「チナ事業」が俎上にのせられる。「チナ事業」をめぐる三人の修道士、サンチェス神父(第三章)、アコスタ神父(第四章)、初代マニラ司教サラサール(第五章)の言説が詳細に分析され、カトリックを基本に据えた華人認識を維持しながらも、アメリカ植民地のインディオとは異なる他者認識の現出を確認する。政治・経済・社会システムや信仰を異にするとはいえ、「高度な文明」をもつ「対等な他者」として華人は認識されたのであり、「無垢な野蛮人」たる対インディオ認識と落差があった。

第二部「スペイン政庁の対華人観、対明観」では、17世紀前半にマニラで生じた二つの華人暴動(1603年の第一次華人暴動を扱う第七章、1639-40年の第二次華人暴動を分析する第八章)を事例として、スペイン人(スペイン政庁)の現実の華人認識が問われる。先立つ第六章では、フィリピーナス諸島における華人の現況、スペイン側の対華人政策と宣教活動が概観される。当時のマニラは、メキシコとのガレオン船貿易で社会・経済発展が著しく、商人や手工業者を含む多数の華人が来住していた。華人定住者数はスペイン人を凌駕し、改宗者も少なかったことから、スペイン政庁は華人暴動への危惧を深める一方、「高度な文明」圏出身の移民たる華人は改宗者か否かを問わず、マニラの社会・経済システムに

とって不可欠の存在であった。

スペイン人と華人との関係は、早くも17世紀前半の段階において、不可欠の相互依存関係すなわち「戦略的共存」関係へと変貌していた。宗教(文化システム)を含め固有のシステムを有するスペイン帝国と明帝国は、スペイン帝国の西端マニラを舞台に「対等な他者」として対峙したのである。スペイン人の対華人観は、最初から神学的思考で固定されていたのではなく、むしろマニラでの現実や暴動事件が彼らの華人観の醸成に影響を与えた。他方、第二次暴動時での華人カトリック集団の出現に見られるように、交易とモノを介した「戦略的共存」が成立した後、華人もカトリック・イデオロギーを自己の伝統と融和させる形で受容していく姿勢を示した。終章「ヒトの移動と邂逅」では、以上の議論を改めて要約している。

論文審査の結果の要旨

1570年代～1650年頃のスペイン領フィリピン、とりわけ主要都市マニラにおけるスペイン人と華人との微妙で錯綜した関係を、膨大なスペイン側史料と明清時代の漢文史料などを駆使しつつ、グローバルな視点から位置づけた優れた研究である。

第一に、本書は、異なった文明システムの接点ともいべき近世マニラにおける異文化コミュニケーションの実態を、スペイン語と漢文の両方の史料を読み解き、従来の研究史や最近の研究動向にも配慮しつつ、実証的に考察したもので、刺激的であると同時に説得力がある。これまでの歴史研究は、地域や時代を限定した中で個別研究を行い、仮説を提示する傾向にあるが、本書で扱われたテーマは、こうした手法では十分に捕捉できない。スペインと中国、アメリカ植民地、日本、東南アジアなど多様な地域の情報が必要であり、しかも政治や経済のみならず、修道会、神学、教会組織、公会議などについての知見も不可欠である。これらを可能な限り実証的に追究した本書は、近世異文化コミュニケーション論の白眉ともいべき研究であり、スペイン史を含め今後の近世史研究に大きな影響を及ぼすものと思われる。

第二に、16世紀末～17世紀前半のマニラには、スペイン人、現地先住民に加え、華人、日本人および少数の黒人が混住しており、言語やエスニシティ、宗教の点で典型的な「モザイク社会」であった。華人はマニラ近郊の特定地区に集住し、下級裁判権を有する在地有力者(ゴベルナドール)の下で自治権を享受していたが、伝統的な家族・親族関係を保持する一方で、社会・経済格差に加え、改宗や現地社会への適応に個人差が見られた。こうした状況は、言語や宗教、エスニシティのもつ歴史的意味を再検証するにあたり、想起されて然るべき歴史的先例である。17世紀前半のマニラには高山右近をはじめ多数の日本人キリシタンも定住しており、日本人移民や日本人の同化を考える上でも、本書は重要な示唆を与えてくれる。

第三に、本書は、言説分析(第一部)と植民地現地の実態分析(第二部)を接合する試みである。スペイン人修道士の抽象的な「チナ事業」論の背後に、どのような経済的、宗教的な現実的利害と合理的な計算が存在したのか、言説と実態との乖離と連関性を、史料に基づいて明らかにした点は、高く評価できる。

本論文の独創性とメリットは、以上の三点に要約できるが、問題が全くないわけではない。本論文のキー概念の一つである「戦略的共存」関係の捉え方が一面的で、当時の東アジアにおける国際秩序の要である中華世界の巨大な影響力をとらえ切れていない。それは、海域アジア史の領域で近年急速に研究が進んでいる、華人のネットワーク論に関する研究

成果が十分に取り入れられていない点に起因している。

また、スペイン帝国の事例を相対化するために、18世紀以降のイギリス植民地帝国への言及がなされているが、比較史的考察としては、直近の18世紀初頭の蘭領バタヴィアにおける華人虐殺との比較の方がより適切であろう。さらに、史料に限界はあるものの、マニラに居住した華人の宗教的アイデンティティ、カトリックへの改宗の動きは、後のフィリピン諸島での展開を考える上で重視すべき課題であろう。

しかし、そうした残された諸課題のために、関係史的手法により16・17世紀の海域アジア世界にヨーロッパ史の側から新たな問題を提起した本論文の価値が大きく損なわれるものではない。よって本論文を博士(文学)の学位にふさわしいものと認定する。